

軍事史学

第58巻 第2号

巻頭言

朝鮮戦争における「捕虜」・「洗脳」・「教化」 赤木完爾

フランク・シナトラやローレンス・ハーヴェイが出演した一九六二年公開のアメリカ映画「影なき狙撃者」(The Manchurian Candidate)は、朝鮮戦争で中国人民志願軍の捕虜になったアメリカ兵が満洲の収容所で洗脳され、帰国した後に、外部からある刺激を与えると無意識に暗殺者に変身するというサイコスリラーである。この映画が象徴するように社会体制の優劣を争った冷戦のなかで闘われた朝鮮戦争では、戦争捕虜をそれぞれの陣営が奉ずるイデオロギーにどのように教化するかは重大な問題であった。ことにトルーマン大統領は、捕虜の自由意思による送還という原則を堅持したため、国連軍側の捕虜尋問の場もイデオロギーの戦場となった。

戦争は、一九五一年後半には現在の休戦ライン付近での陣地戦となった。同年七月から始まった休戦交渉において、捕虜問題はすこぶる難航した。アメリカ側が懸念したのは、中国の教化により捕虜の一部が敵の宣伝工作に協力していたことであった。一九五三年七月の休戦協定成立後、中国・北朝鮮側に捕虜となったアメリカ兵のうち、二一人が中国に残った。他方、国連軍側の中国兵の捕虜のうち、七、一〇九人の男性捕虜と一人の女性捕虜が中国への帰還を選択し、一万四三四二人の捕虜が中国への送還を拒否し台湾を選択した。

捕虜収容所のなかで筋金入りの反共産主義の捕虜が作られた。彼らの多くは国共内戦の過程で国民党軍から人民解放軍に徴募された兵士であったが、中国に帰国すれば処刑されると信じた者も多かった。多数の捕虜が台湾を選択したことは、北京政府にとっては衝撃であったと思われる。けれども相当数が最終的に台湾を選んだことは、西側陣営の魅力が自然に作用した結果ではない。アメリカ側は、中国参戦以前から捕虜に対して反共産主義を促進するための尋問と教化の計画を作り始めていた。しかしこの計画はすぐには実施出来なかった。中国軍の介入によって、それどころではなくなったからである。一九五一年前半に、猛将リッジウェイの反攻によって戦線が安定する過程で大量の中国軍捕虜が生じたとき、依然としてアメリカ側には十分な準備はなかった。その間隙に入り込んだのが国府である。

常成 (David Cheng Chang) の近年の研究『The Hijacked War: The Story of Chinese POWs in the Korean War』(Stanford University Press, 2019) によれば、捕虜の自由意思による送還というトルーマンの方針を台湾への捕虜受人という形で実現可能にしたのは蒋介石である。彼は、日中戦争中に沿岸部から内陸に避難した大学生を中心に三千人から五千人といわれる大量の英語通訳を養成し、中国・ビルマ・インド戦域で米・英軍とともに従軍させた。それら通訳はマッカーサーの承認のもと、今度は国連軍の捕虜尋問に投入されることになった。一九五二年から朝鮮戦争は、蒋介石が乗っ取っていたと常成は主張する。国際内戦であった朝鮮戦争の一つの側面である。

(慶應義塾大学名誉教授)